

## 昭和42年7月豪雨時の茨木市街地中心部浸水被害分布

松田 貴（元関西大学文学部地理学教室）

はじめに

茨木市南部の比較的高度が低い地域では、安威川<sup>あいがわ</sup>、茨木川<sup>あきがわ</sup>、勝尾寺川<sup>かつおじがわ</sup>、佐保川<sup>さほがわ</sup>の溢水などで、これまで幾度となく洪水禍があった。そこで『新修茨木市史』自然地理分野の編さん作業の中で、防災に関して本市域を対象とした洪水ハザードマップの作成を始めている。その基礎データとして、過去に発生した浸水被害の分布を知る必要があった。

昭和以降の主な水害による本市の被害は次のようである。昭和7年7月8日の豪雨では、茨木川の堤防が決壊し、家屋が浸水、数百ヘクタールの農地が被害にあった。昭和9年9月21日には、室戸台風が近畿地方をおそった。市内各地で河川が決壊し、学校校舎や一般家屋、農地が浸水した。茨木高等女学校の校舎が倒壊し、死者6名、重傷者10名を出した。一年後の昭和10年6月29日の豪雨でも、市内各地で河川が決壊が相次ぎ、中南部は長期間浸水した。これらの水害が契機となり、安威川・茨木川合流工事が行われた。戦後は昭和25年9月3日に、ジェーン台風が京阪神を直撃した。茨木市では40戸が全壊、44戸が半壊し、37ヘクタールの農地が冠水した。この災害では大阪府下に災害救助法が適用された。

これらの水害での被害は大きいですが、戦前・戦後期と現在とでは本市の土地利用が著しく変化しているため、当時の浸水被害分布を今後の利用に供される洪水ハザードマップの基礎データにすることはできず、本報告では昭和42年7月豪雨時の浸水被害分布を、その基礎資料とすることにした。というのは本災害は、災害救助法が適用された豪雨災害としては最も新しく、北摂地域における治水事業の現在の基準となっているからである。

### 昭和42年7月豪雨災害の概略と文献・資料

この集中豪雨の際には、西日本各地に堤防決壊や山崩れがおり、死者266名、行方不明者13名、負傷者374名、その他建物・農地などに大きな被害があった<sup>\*1</sup>。

1. 表1 参照

7月9日12時から22時までの連続雨量は茨木市街地で247mm、時間最大雨量は60mmで、増水した安威川、佐保川、勝尾寺川では堤防の決壊や溢水、橋梁の流失や破損が相次いだ。また、丘陵地の溜池からも溢水が発生した。

本市の人的被害は、死者1名、負傷者9名であった。また、住居については、主に北部の山地で全壊・流失10戸、半壊3戸、一部破損11戸、主に中南部の平地で床上浸水1,892戸、床下浸水10,618戸の被害が発生した。この浸水家屋数は、当時の本市全家屋数の約3割にあたる。

表1 昭和42年7月豪雨による各府県の被害状況

府県名	人 (名)			住 居 (戸)				
	死 者	不明者	負傷者	全 壊	半 壊	流 失	床上浸水	床下浸水
滋 賀		1	1	6	9		35	1,240
京 都					2		406	6,428
奈 良							1	1,110
和歌山			4	6	12		817	5,278
広 島	159		231	352	466	20	4,681	24,295
鳥 取							83	
島 根					2		1	221
岡 山			8	11	7		75	3,372
香 川			1	1			11	1,990
徳 島	5			4	8	2	5	41
愛 媛	9		9	24	36	3	187	2,575
高 知			2	9	16	2	1,046	2,036
兵 庫	89	10	102	80	81	20	14,311	73,045
大 阪	4	2	16	23	27	21	12,277	65,843

(各府県警察本部調べ)

本災害に関する文献・資料を調査したところ、災害時の気象状況や被害の概要、また復旧活動の内容をまとめた資料を得ることが出来た。浸水被害に関しては、町丁目別の浸水世帯数が、茨木市災害対策本部の調査によって記録されていた。また、床上浸水世帯の位置を行政資料から知ることが出来た。茨木市の浸水被害についての学術論文は見あたらなかった。

浸水地域を復元することにしたが、それは、浸水位や浸水期間を面的に把握することを含む。そのため、平成14年11月に、豪雨災害当時から在住する住民に対して聞き取り調査を行った。

現時点では本市全域の復元には至っていないが、2003年春までに得られた茨木市街地中心部<sup>※2</sup>の調査結果を報告する。

## 聞き取り調査の方法

聞き取り調査に先だって、市内を網羅するよう30地区の自治会長を選定して書面で協力を依頼した。

その後、電話で訪問先（自宅か職場か）や訪問日時を決定し、訪問調査を行った。現自治会長が当時のことを記憶していない場合には、当時をよく知っている方を紹介してもらい、再度依頼を行った。訪問時には、当時と現在の地形図、住宅地図、および航空写真を持参し、位置を確認・記録しながら聞き取りを行い、さらに実際に現地を観察した。

## 茨木市街地中心部の浸水被害分布（図3）

今回報告する茨木市街地中心部では、12名の方々のご協力を頂いた。表2に協力者の居住地域と年齢を示し、図2にそれぞれからの聞き取り範囲を表す。

表2 聞き取り調査の協力者居住地域と年齢

調査地域区分	居住地域	推定年齢（歳）
西部	上中条1丁目	60
	上中条2丁目	65
	駅前3丁目	70
	下中条町	70
中央部	元町	70
	片桐町	65
	片桐町	65
東部	東宮町	65
	宮元町	65
	永代町	65
	別院町	65
	稲葉町	75

注記：調査地域区分のうち、西部は小川水路流域で、中央部は高瀬川西岸、東部は高瀬川東岸を意味する。

2. 図1 参照。

## 1. 小川水路流域（調査地域西部）

小川水路（図1）は、茨木市郡地区の丘陵地に始まり、勝尾寺川・茨木川南方に並行して東流し、名神高速道路茨木インターチェンジ付近から南に進路を変え、調査地域西部を通過して大正川に合流する。市街地中心部（図1）では、小川水路は元茨木川の西方に並行して南流する。この付近では、西の六反田川から東の元茨木川に挟まれた範囲が、すべて小川水路の流域に当たる。また東の元茨木川の堤防は高く、地盤高は北西から南東に低下する傾向があるために雨水が元茨木川西側に集中する。

昭和42年当時、調査地域西部は大部分がすでに宅地化されていたが、小川水路はコンクリートなどで護岸されておらず、杭と板で柵をただけで、まだ宅地化されていない戦前と同じ形態であった。水路幅は、当時と現在でほぼ同じであるが、水害後の改修で水路深は大きくなった。

本集中豪雨災害時、小川水路と道路との交差部で水路詰まりが発生し、その付近から溢水が起こった。聞き取り調査で確認がとれたのは図3中1-1、1-2の2箇所であるが、地形と浸水家屋の分布から判断すると、その他にも1-3、1-4、1-5で溢水が発生した可能性が高い。

### ①昭和42年7月豪雨で滞水した地域（図2、図3）

上中条1丁目の東部は、床上浸水の被害にあった。豪雨の翌日にあたる7月10日未明に徐々に水位が上がり、数時間滞水した。図3の1-6の最高水位は、床上70cmであった。道路上に滞っていた水には、ゴミや汚物がまじっていたが、流木や建材は含まれていなかった。同じ上中条1丁目の西部の住居は地盤高度が東部に比べて高く被害が少なかった。最も西の1-7に位置する住居は、庭も全く浸水しなかった。

上中条2丁目は、7月10日の昼間、徐々に浸水し始め、1-8の最高水位は約1mだった。ちょうど戸建て住宅の床面に達する程度の水位だったので、床上浸水と床下浸水の住居が混在した。住居周辺の水は半日ほど滞った。

下中条町の1-2では、集中豪雨の翌日に水路詰まりが発生し、そこから西に向かって溢水した。周辺では徐々に水位が上がり、1-9の最高水位は床面から約1mであった。

### ②洪水流が流下した地域

市役所西側の駅前3丁目では7月9日21時頃、主要地方道茨木寝屋川線（通称駅前通り）か

ら、南方へ川のように水が流れはじめ（図3矢印①）、徐々に水量が増えた。六反田川東岸に近い駅前3丁目西部は床下浸水地帯であるが、小川水路に近い東部は床上浸水地帯である。夜半には水が引き、翌日には掃除を行うことができた。

この駅前3丁目の南隣にあたる下中条町でも北から南へ速い洪水流が流下した（矢印②）。東西方向の道路を横切るように、一時速い水が流れたが、水は道路に並行する水路や南方の水田に流入した。洪水流はうす茶色の泥水で、木材や汚物は混じっていなかった。集中豪雨が収まった後の方が高水位となり、浸水被害は翌10日の朝に発生した。浸水後、道路や庭に泥などはあまり溜まっていなかった。

これまでに述べた浸水被害は、小川水路からの溢水によって生じた。溢水は、集中豪雨のあった7月9日から翌10日の昼にかけて頻発した。まず、集中豪雨時に高橋付近（図3の1-1）の水路詰まりが発生し、市役所付近で溢水が始まった。その後、浸水域は上流に広がり上中条1丁目が7月9日深夜から翌10日未明に浸水した。翌日になって、浸水の範囲はさらに拡大し、上中条2丁目まで浸水した。また、下流の東中条町でも図3の1-2で翌日に水路詰まりが発生し、浸水被害があった。

上中条地区や駅前地区では宅地率が高く、水田はほとんどなかった。しかし、下水道が整備されておらず、排水のほとんどを小川水路に頼っていた。また、主要地方道茨木寝屋川線（駅前通り・図2）より南では北（上流）からの溢水流が道路を流下したが、調査地域南部の下中条地区より南側では当時は宅地率が低く、道路を流れた水は比較的早く水田等に排水された。

## 2. 高瀬川流域（調査地域東部）

高瀬川（図1）は、安威川・茨木川合流点付近の田中町内から、茨木市街地東部を南へ流下して島地区で北川水路に合流する。市街地東部は大部分が宅地化されていたが、小川水路同様、高瀬川もコンクリートで護岸されていなかった。

市街地付近の高瀬川流域は北西から南東への傾斜があるため、右岸（西方）からは排水が流入するが左岸（東方）からはほとんど流入しない。また、豪雨時に高瀬川が増水すると、高度の低い左岸へ溢水する。

当時、高瀬川の起点では治水上、難点があった。五日市水路、治良川からの排水は「安威川の水位が低いときは安威川に流下するが、洪水時に安威川の水位が高くなると茨木川の下を立

体交差する逆サイフォンを経て流下<sup>\*3</sup>」して、高瀬川に流入していた。つまり、安威川高水位時には安威川への排水口を閉じて、茨木川床の下を潜る水路の水門を開くのである。それゆえ、高瀬川の集水面積は豪雨時の方が通常時よりも拡大する構造<sup>\*4</sup>になっていたが、高瀬川の排出力が、洪水時に対応していなかった。

昭和42年7月豪雨時、上流の五日市地区<sup>いつかいち</sup>で茨木川が溢水（図4）したため、逆サイフォンを経て高瀬川に流入する水量が激増した。増水した高瀬川は、調査地域東部で東岸に溢水し、高瀬川と阪急京都線に挟まれた永代町<sup>えいだいちょう</sup>、竹橋町<sup>たけはしちょう</sup>周辺は長時間滞水した。西岸は、豪雨後に高瀬川の支流からの溢水が発生したが、排水が比較的速やかで被害は小さかった。

#### ①昭和42年7月豪雨で滞水した地域

高瀬川左岸地域の永代町、竹橋町、左・右岸にわたる宮元町<sup>みやもとちょう</sup>で水位が高く、滞水時間が長かった。また、調査地域北縁の東宮町<sup>とうぐうちょう</sup>でも滞水した。

これらの地域では7月9日20時頃から浸水が始まり、徐々に水位が上がって21時頃が最高水位であった。高瀬川には、ゴミの混じった茶色い濁流がどんどん流れていて、所々で水路が詰まり、周辺から溢水した。夜半ごろには水位が下がったが、翌朝まで滞水した。その後も道路や農地の水位は高く、2、3日水が残っていた。

永代町東部から竹橋町の、阪急京都線の盛り土に面した住居（図3の2-1付近）は床上浸水地域に属し、最高水位は地面から約1m、床面から約10cmであった。また、線路の盛り土のすぐ北西の道路（2-2）は1m強の水位であった。

永代町北部には、道路が敷地よりも高くなっている商店街がある。この通りに面した商店の倉庫（2-3）は、1mの浸水位だった。倉庫の奥の倉は他の棟より1mほど床面が高いので、ここには浸水しなかった。永代町内には当時まだ農地があったが、2-4の農地の浸水位は1mを超えていた。

宮元町でも高瀬川の周辺や、左岸で浸水位が高く、床上浸水の被害があった。高瀬川沿いの旧ナガサキヤ周辺（2-5）の浸水位が特に高く、1mを超えた。宮元町の中央保育所付近の住宅（2-6）は、床面近くまで浸水した。宮元町の住居は、床の高さによって、床上浸水の住居と床下浸水の住居が混在した。

別院町<sup>べついんちょう</sup>では、床下浸水の被害住居が多かった。別院町西部の高瀬川支流沿いの住宅の浸水位

3. 『茨木市総合計画』（1971）P.183より引用。

4. 図4参照。

が比較的高かった。別院町南部の2-7の浸水位は30cmほどで、床下浸水の被害があった。また、駅前の交番近く(2-8)で水路が詰まり、付近が浸水した。

また市街地北部の東宮町では、高瀬川に直接面した住居(2-9)が浸水被害にあった。さらに、町内の水田はほぼ全てが冠水した。しかし浸水位はそれほど高くなく、畦が見える程度であった。

## ②路上を洪水が流れた地域

当時、阪急京都線より南東の地域は、水田と新興住宅地が混在していた。駅から離れるほど宅地率が低い傾向があり、高瀬川下流部の府道(2-12)以南は大部分が水田で、古くからの集落が塊状に存在していた。

高瀬川は稲葉町<sup>いなばちょう</sup>内で一旦東向きに進路を変え、その後再び南向きに流れる。この方向転換部付近(2-10)で溢水が生じ、泥の混じった溢水流が路上と幅約1mの小水路を北から南へ速い速度で流下した(矢印③)。付近の道路は7月9日20時頃から浸水し、徐々に水位が増した。10日未明2時頃、水位は最高に達し、高瀬川右岸の住宅(2-11)は床上まで浸水した。10日朝4時頃、2-12付近の道路上の水位は数十cmで、ボートを曳いて歩く人もいた。水に流れは無く滞っていたが、昼までに引いていった。

水田はその後しばらくの間滞水した。水田の水位は最大50cm程度であった。

## ③高瀬川の支流から溢水し、翌日未明に浸水した地域

調査地域中央部(高瀬川右岸地域)では、7月9日の浸水被害はほとんどなかった。豪雨のために道路が水浸しになり、道路沿いの水路が水位を増したが、水路からの溢水は発生せず、高瀬川の方向へ排水が可能であった。

しかし、以下に述べる一部の地域では豪雨の翌日の7月10日に、高瀬川の支流である小水路からの溢水被害が生じた。

東宮町の東部で10日未明の3時~4時に幅約2mの水路(高瀬川の支流)が溢れた。水路から急激に水が溢れ、付近で床下浸水の被害が発生した。2-13地点の浸水位は地面から約30cmであった。水は木切れや建材を含んでいた。

元町<sup>もとまち</sup>でも、豪雨がおさまった10日未明に町内の小水路から溢水した。水は少しずつ溢れ、下流に流れずに滞水した。小水路に面した2-14の住居で床下浸水の被害があった。浸水位は地面から20~30cmで、床の低かった集合住宅では床面近くまで浸水して畳を上げていた。周辺の

水田では、水が50cm くらい溜まっていて、稲が見えないくらいだった。しかし、滞水は長時間続かず、比較的早く排水された。

本集中豪雨災害時、高瀬川流域では高瀬川本流からの溢水および滞水と、本流からの溢水流の流下、さらに支流からの溢水による浸水被害が発生した。

調査地域東部（高瀬川左岸地域）は、高瀬川からの溢水で長期間滞水した。阪急京都線の盛り土が排水を遮ったことも要因と言える。やや南方の別院町は、阪急茨木市駅南のガード下（2-15）から排水が可能だったこともあり、浸水被害が比較的短期間で終わった。

調査地域中央部（高瀬川右岸地域）は、茨木川が存在したところは茨木川からの洪水流が流れる危険があったが、昭和42年7月豪雨災害時には被害が小さかった。この地域では主に床下浸水の被害が発生したが、これは高瀬川が満水になった影響で支流から高瀬川本流への排水が不良となったのが原因である。

稲葉町や舟木町、大池町などでも溢水流が一時的に流下し、浸水被害が発生した。しかしこれらの地域は市街地中心部と比べて宅地率が低いため付近の水田に排水されて、長期間滞水することはなかった。

高瀬川が増水した大きな原因は、茨木川との交差部の構造上の問題である。豪雨時に中小水路への放流量を増やすという方法に無理があった。これは、当初から問題視されており、本集中豪雨災害後に解消された。現在は安威川・茨木川合流点付近に安威ポンプ場が設置され、豪雨時に安威川の水位が高くなっても、五日市水路や治良川の水をポンプで揚水して安威川に排水することが可能である。

市街地の滞水が長期化した原因は、宅地化による遊水機能の低下と、盛り土による排水障害である。市街地の拡大に伴って、遊水機能を持つ農地は本災害後も減り続けている。盛り土については、阪急京都線が通水可能な高架線になるなど改善が見られる。

おわりに

現時点で報告できる成果は以上である。本市全域の復元に到達していないことは残念だが、後の機会に報告できることを祈りたい。



本報告では地域の方々からの聞き取りが重きをなしている。調査に際しては市民の方々に多大なる協力を頂いた。また本研究を通じて、関西大学文学部の木庭元晴教授からご指導を得た。ここに、感謝の意を表したい。

#### 《参考文献》

##### ・都市計画および災害史：

茨木市企画部企画課（1971）：『茨木市総合計画』、292p.

茨木市史編纂委員会（1969）：『茨木市史』、696p.

茨木福井の歴史編纂委員会編（1997）：『茨木福井の歴史』371p.

茨木市議会史編さん委員会編（1988）：『茨木市議会四十年史 市制施行四十周年記念』（茨木市議会）、423p.

##### ・洪水に関する自然地理学論文：

赤桐毅一（2001）：洪水ハザードマップ。地図ニュース、no. 348、p.11-14.

栗城 稔（1996）：都市化と水害（特集・自然災害にみる南北問題）。地理41（9）、p.46-53.

藤野良幸（1961）：伊勢湾台風による近畿河川の水害。生産と技術1960（2）、p.20-26.

花岡正光・山本 博・割石 徹（1984）：1981年8月の二度の豪雨災害—札幌市—（特集・大水害の教訓）。地理29（6）、p.19-28.

##### ・調査法：

大矢雅彦（1983）：『地形分類の手法と展開』、古今書院、219p.

大矢雅彦（1986）：水害地形分類図の作成とその活用。地理（特集・災害マップ最新情報）、31（5）、p.53-65.

斉藤 功（1997）：有意義な聞き取り調査（特集・聞き取り調査のすすめ）。地理42（4）p.38-43.

#### 《主な参考資料》

##### ・本災害に関する記録：

茨木市災害対策本部：昭和42年7月9日 集中豪雨災害状況報告。

大阪府（1968）：昭和42年豪雨災害概要。

・防災に関する行政資料：

茨木市：土地分類基本調査（5万分の1、表層地質図など）。

茨木市（1987）：茨木市被害想定調査報告書および付図（水害要因分類図など）。

大阪府（1980）：茨木川全体計画概要書（安威川合流点～福井橋）。

大阪府：安威川総合開発事業全体計画書（綴り）。

国土交通省河川局治水課（2001）：浸水想定区域作成マニュアル。

・地図・航空写真：

茨木市（1999）：茨木市内水路網図（1万分の1を基図）。

国土地理院（1961）：白黒航空写真（約1万7千分の1）。

住宅協会（1967）：大阪府全商工住宅案内図帳（1800分の1）。

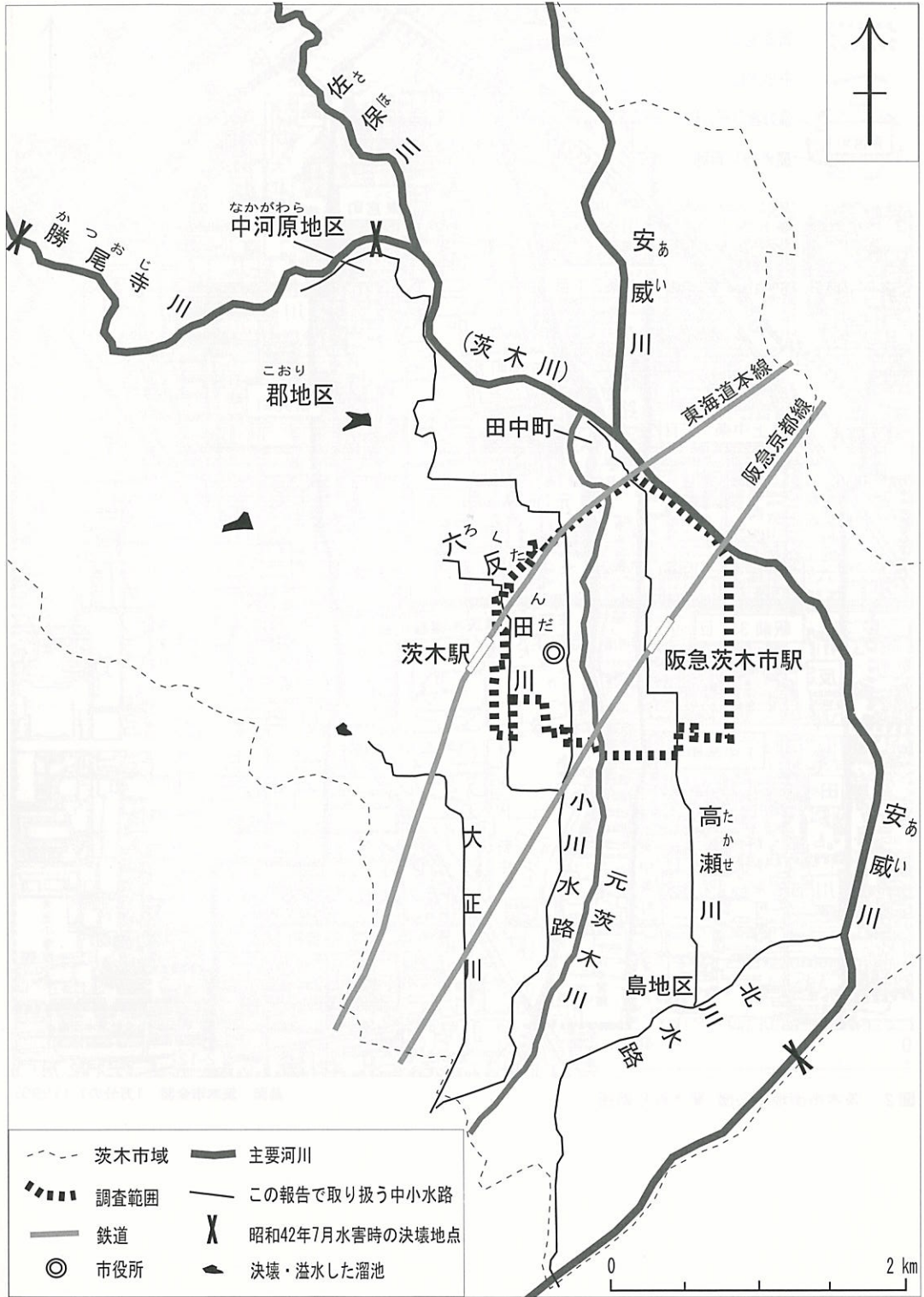


図1 調査範囲 位置図

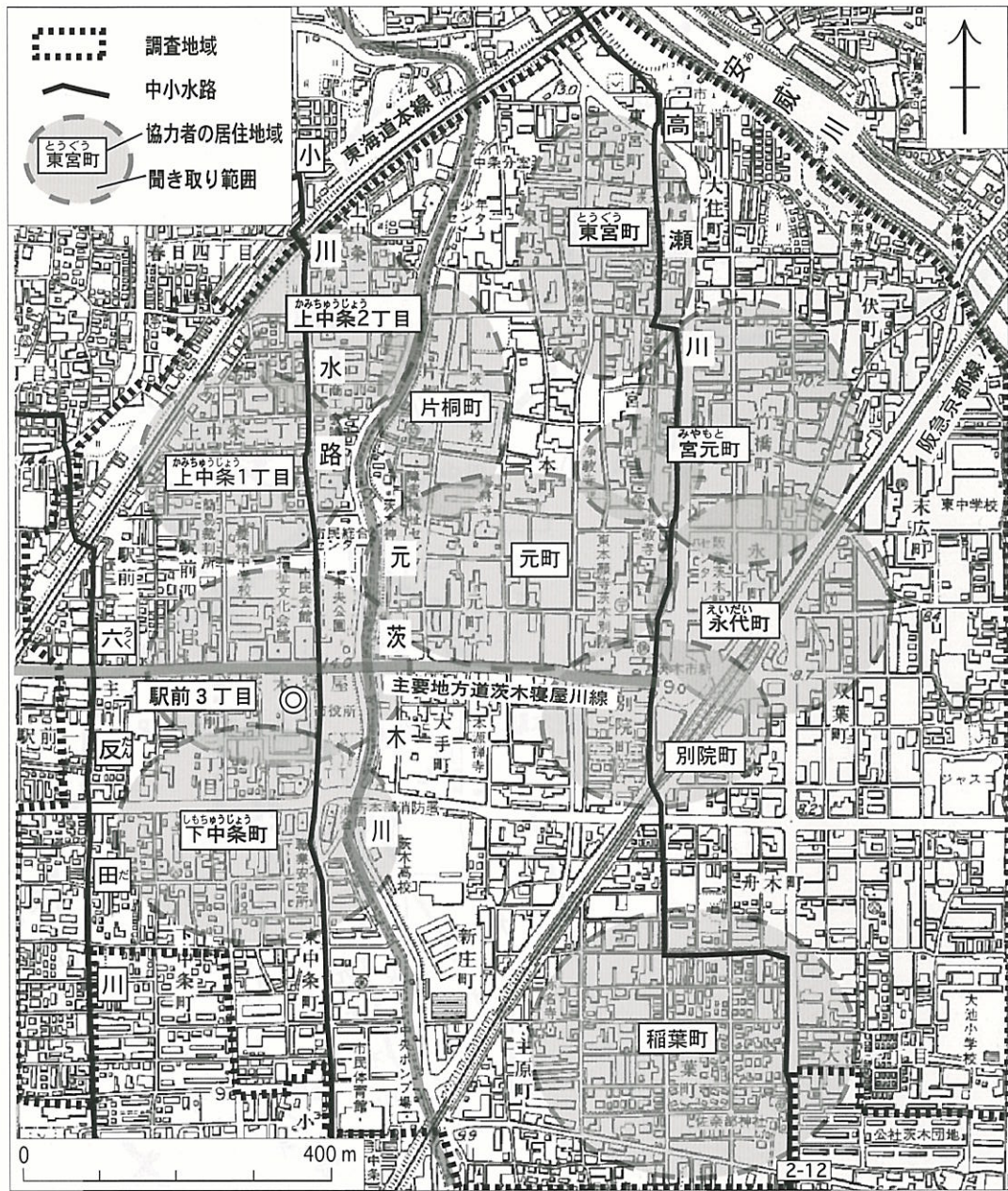


図2 茨木市街地中心部 聞き取り範囲

基図：茨木市全図 1万分の1 (1999)

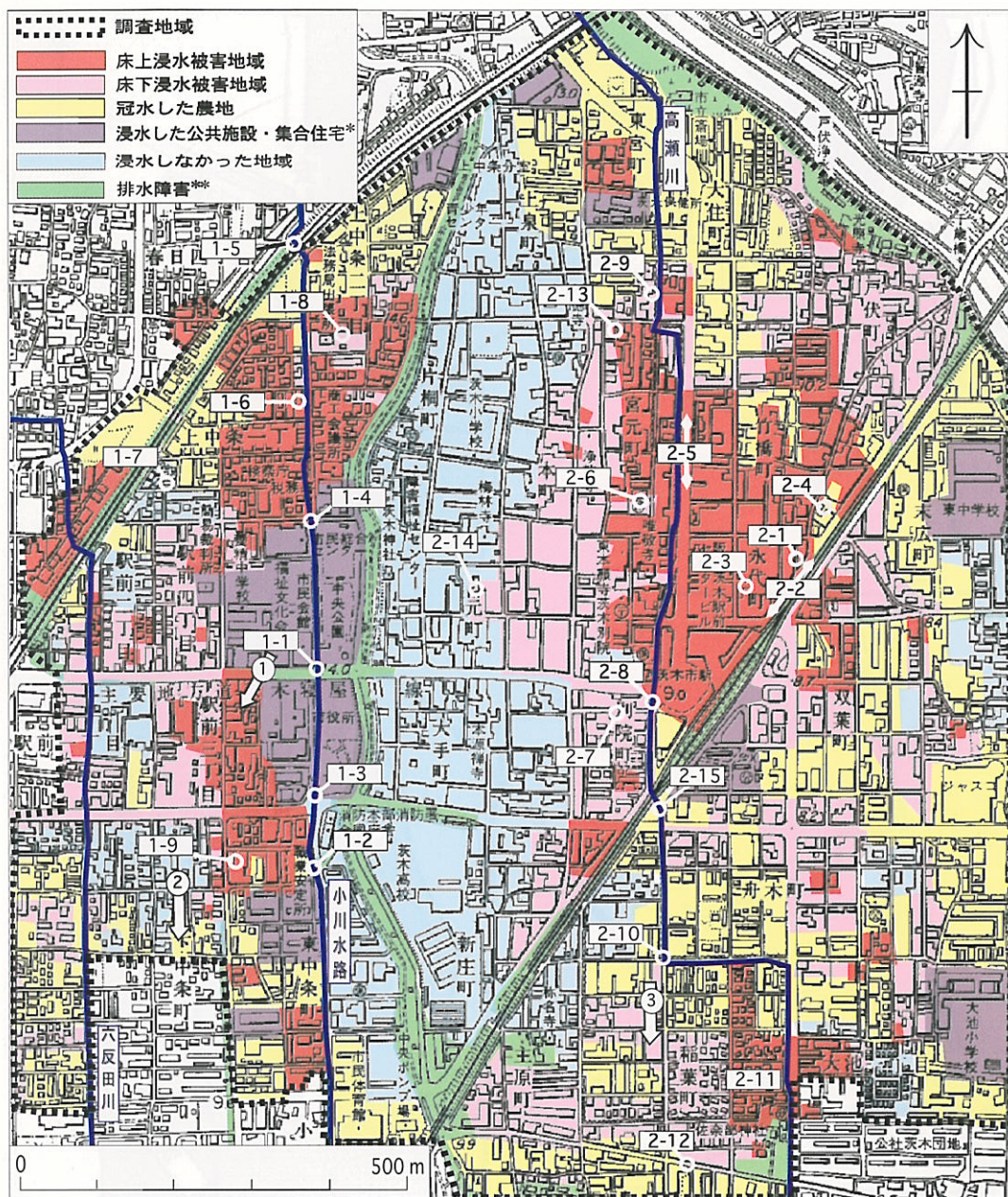


図3 昭和42年豪雨時の浸水被害分布  
 茨木市役所災害対策本部の現地調査と、聞き取り調査をもとに作成  
 \* 工事中の箇所を含む  
 \*\* 排水障害…排水の障害となった道路・盛土地・微高地

基図：茨木市全図 1万分の1 (1999)

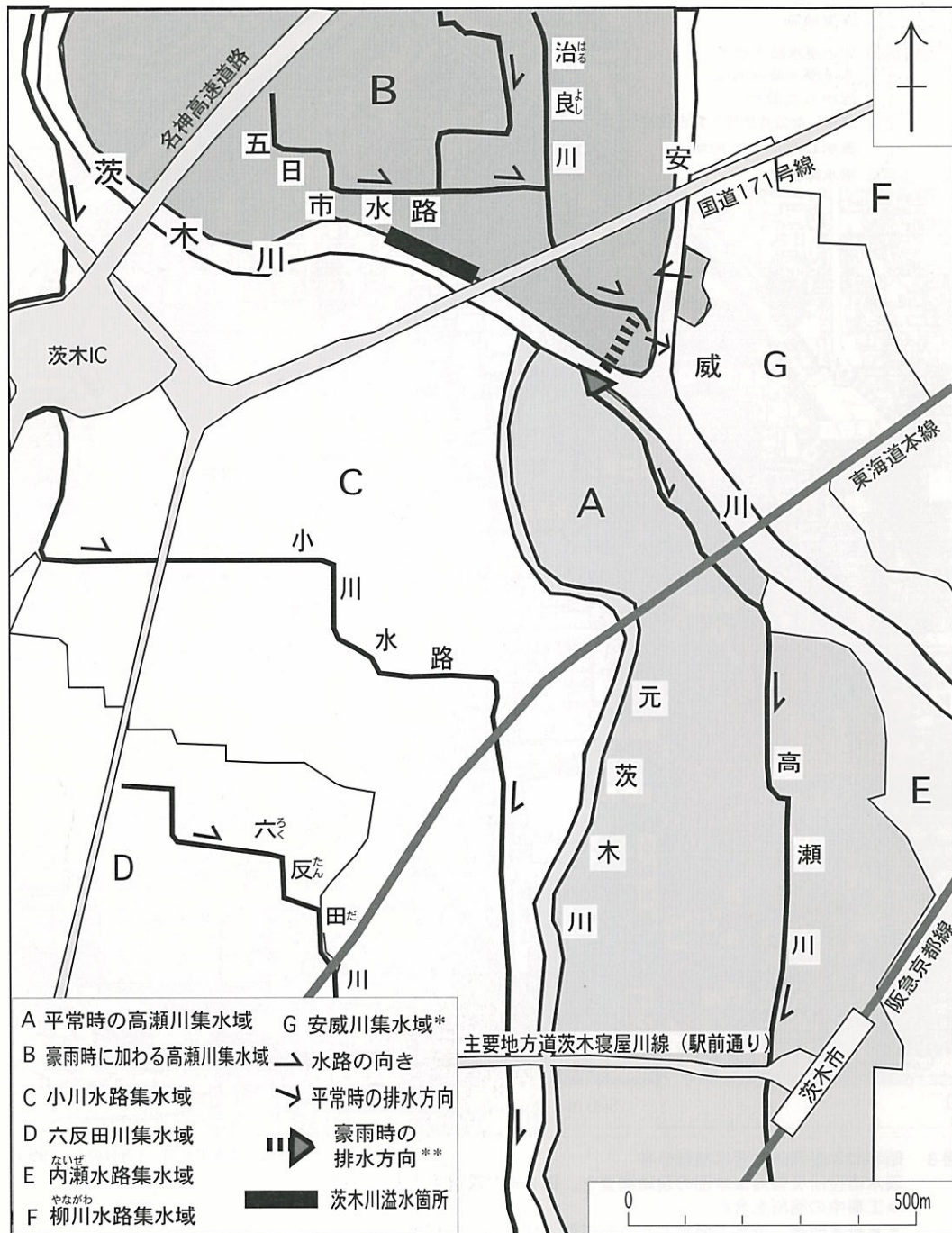


図4 中小水路の集水域

茨木市水路網図、茨木市総合計画をもとに作成

\* 中小水路に集水されず、直接安威川へ排水される地域

\*\* 豪雨時に、茨木川の下を通過して高瀬川へ流入した経路